

こんな噺がこわかった ～落語恐怖体験記～

<猫定(ねこさだ)>

黒猫を懐に入れた男（定吉）が賭場に現われる。「クマ」と名付けられたこの猫はただの猫ではない。賽が振られると、壺の中が見えているわけでもないのに、丁半を見分けて鳴き声で飼い主に知らせてくれるという凄い猫。

留守中に若い男と不貞な関係になった女房は、この男に亭主を殺させる。襲われた瞬間に黒猫は懐から飛び出して難を逃れたが・・・。

最後は、黒猫が女房と間男を殺して主人の仇討ちを果たすという恐ろしい筋書き。

六代目三遊亭圓生の高座をカセットテープで聴いたのがこの噺との出会いだったが、想像を絶する展開と落語とも思えぬ凄まじい語りに度肝を抜かれた。

定吉が闇夜に刺客に襲われる場面の迫力に腰を抜かしていると、黒猫が主君の仇討ちをする場面ではさらにその上に行く緊迫感に包まれる。そして最後に黒猫が殺されて一連の事件が終いになるのだが、この猫が始末される瞬間の描写ももの凄い。

定吉と黒猫との出会い、黒猫に賽子（さいころ）を見せている内に丁半を理解する場面などでじっくりと下地を描ききっておいて、後半の毒々しい場面につないでいく。脳裏に鮮やかに形成されていく仮想映像はモノクロームの 16 ミリの映画を見るような世界。山場の場面はいずれも闇夜の出来事で、モノクロームの映像がくっきりと描き出してくれる。

六代目圓生以外の方が語るのには聴いたことがないが、誰でもできる噺ではないのだろう。

背筋に冷たいものが流れるような落語を経験したのは、この噺が始めてだった。

<鰍沢(かじかざわ)>

身延山詣りの帰途江戸の商人が雪の山道で迷い、山中の一軒家に一夜の宿を求める。一軒家の女主のもてなしを受けている内に、その顔に見覚えが……。首から頬にかけて刀傷がありはするが、美しい顔立ち……。吉原の女郎屋に奉公していたお熊という女に違いないと声をかける。

素性を知られたお熊は、卵酒にしびれ薬を入れて殺害を謀る。やがて帰ってきた亭主の伝三郎の力を借りて、旅人の財布を奪おうとするのだが、身延山の護符の御利益で旅人は息を吹き返し、逃亡。

雪の山道で追いつ追われつの追跡劇の末、銃弾も飛び交う中で旅人は鰍沢の急流（富士川）に落ちてしまうが……。

幕末の頃、三遊亭圓朝が「三題噺の会」で作ったと言われているが、具体的な「三題」について諸説あるらしい。

この噺も前述の「猫定」同様に六代目三遊亭圓生が数多く手がけたようで、カセットテープは CD に変換して大事に残してある。他の噺家がやるのを何度か見聞きしたことがあるが、どこかつまらない。

「雪の山道で道に迷った」で始まり、辛うじて得た今宵の宿で出会った「刀傷のある女」、一夜のもてなしを得るために辿り着いた一軒家で待っていたのは「殺し」、雪の中を逃げる内に「富士川の急流に落下」と息もつかさず恐怖が襲いかかる。さらに襲いかかる銃弾に「もはやこれまで」と肩に力が入る客席はシーンと静まり息の音さえ聞こえない。

日本三急流のひとつに数えられていた富士川、河口の町に生れた私には馴染み深い存在。しかも南アルプスの山に入る時にいつも帯同していた五万分の一地形図「鰍沢」でこれまた馴染み深い地名。

甲府盆地の北東から来る笛吹川と北西から来る釜無川が合する地点、さらに滝沢川・坪川・戸川などの中規模の河川が合して大きな流れになるのが鰍沢。鰍沢を過ぎると富士川の両岸には山が迫り、狭い流れが山肌を削りながら荒れ狂う。こういった環境が予め理解できていると一層迫力のある噺になる。

初めてこの噺を聞いた日から虜になってしまった。

余談になるが、ある人のエッセイの中で「落語に出てくる念仏は南無阿弥陀仏が多く、南無妙法蓮華経は少ない」と書いた一文を目にしたことがあるが、もし事実だとしたら「堀の内」とともに稀少落語かもしれない。

<鷺とり(さぎとり)>

まるで他愛ない嘘で塗り固めたような噺なのだが、きちんと語ると臨場感溢れるドラマに生まれ変わってしまう。だから簡単な噺が一番難しいと言われるのかもしれない。

ある男が鷺を捕獲に行く。一羽ずつ捕まえては腰に結んだ紐に挟み込んで……。やがて腰の周りは鷺の衣装を着けたようになるのだが、鷺が暴れ始めたため男は天空高く運ばれてしまう。

辛うじて四天王寺の五重塔の九輪に捕まって難を逃れたのだが……。

この間の出来事は、実際には起こりえないようなことなので、唯々滑稽なシーンに過ぎない。面白おかしくやってしまえばそれだけのことなのだが、ここを丁寧に丹念に語ることで聴き手を大きな盛り上げりに導くことができる。聴いている人達は、自ら共に空を飛んでいるかのような錯覚に陥り、仮想映像には上空から見下ろした風景が広がって、高所に居るゆえの恐怖感さえ感じてくるから不思議だ。

聴き手を仮想映像の中に引きずり込んだ後で終局に向かうのだが、何とも残酷な結末になる。

世にある筈もない架空の出来事を描いているだけなので、滑稽にやってしまえば滑稽な話としては成り立つのだが、精彩に細密に演じることで真実味がじわじわと増してきてもの凄いドラマに生まれ変わってしまう。

この残酷な結末にいたる最後のシーンには恐怖感さえ感じるが、私が気に入っている落語のひとつだ。寛政年間に出版された笑い話の本に載っていた話が原型と言われており、上方落語として世に出た後で江戸落語としても広まったらしい。「鴨とり権兵衛」など類似した内容の民話も数多く存在する。

以上